

154. 昭和62年度滋賀県下における発掘調査の紹介 その2

14. 築と祭祀の自然河道

能登川町神郷 斗西遺跡

当遺跡は能登川町神郷地先に所在する。北接する中沢遺跡と共に弥生時代後期から中世に至るまでの複合遺跡として周知されている。今回の調査は宅地造成工事に先立ち、昭和61年4月から62年6月まで行い、調査総面積は約9,000m²におよんだ。

主な検出遺構は古墳時代中期から後期の竪穴住居14棟、平安時代後期の掘立柱建物8棟、溝16条、自然河道等である。

自然河道は最大幅約30mを測り北東から西方へ流れが、竪穴住居群の立地点から大きく二方に分岐するものである。この分岐点付近で築遺構・堰3基が検出されている。

築は、西方へ分流する幅約8mの河道を横断して、4条の杭列が杭列間に遺存する藪の束と共に検出されたものである。平面から考えると、現在も琵琶湖周辺の河川で行われている「上り築」の初源形態を示すものといえる。また、この遺構の三か所の杭で、ほぼ完形の土師器壺・甕・一本鋤が故意に打ち抜かれて発見されている。これらの土器群から、築や堰は古墳時代前期に構築されたものと考えられる。



築遺構

また河道の分岐点、特に集落側の岸辺では、古墳時代前期の大量の完形土器や木器と共に、滑石製有孔円盤や破碎鏡が出土している。破碎鏡は後漢の「長宜子孫銘內行花文鏡」で、復原直径は10.2cmである。平面形はバチ形で、内区側の一端にくびれを施し懸垂したものと思われる。この他、舟形や劍形・琴柱形木器、手づくね土器、絵画土器等が出土しており、古墳時代前期の河川祭祀の一例として興味がもたれるものである。さらに当地点の約100m上流方向には式内社乎加神社が鎮座することと、当該地と乎加神社の中間に小型の前方後円墳である龟塚古墳が存在しており、河川祭祀跡・古墳・式内社の祭場としての関連が注視されよう。

(能登川町教育委員会 植田 文雄)

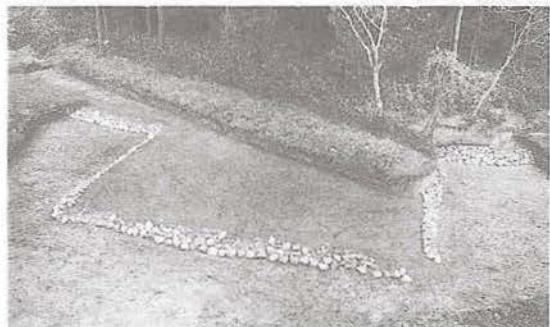
15. 古墳時代後期から平安時代前期の建物群と久保田山古墳の調査

蒲生町木村 木村古墳群・本郷遺跡

両遺跡は、日野川に本流をもつ佐久良川の右岸に開けた沖積地に立地し、名神蒲生バスストップの南側に位置する。調査は、団体営は場整備事業に伴い実施されたもので、今年度は6年目の最終年度に当る。

今年度の調査は、3,900m²について昭和62年6月から約5ヶ月を要して行い、古墳時代後期の竪穴式住居跡1棟や奈良時代中期から平安時代前期の掘立柱建物跡12棟以上をはじめ溝跡・土塙など多数、そして久保田山古墳の周濠および墳丘の一部を検出した。古墳期および奈良・平安期の集落遺構は、昨年度までの調査で多くの遺構が検出されており、東西300m・南北400mに及ぶ大集落であることが明らかとなった。

今回の調査で特に注目されるのは、木村古墳群のう



久保田山古墳

ちの久保田山古墳の調査で從来考えられていた円墳でなく帆立貝式古墳であったことである。この久保田山古墳は、今までの調査で墳丘径55m・周濠部15mの円墳と想定されていた。このため排水路の位置については、墳丘部を外し、周濠内に設置する計画であったことからその地区について調査を実施した。結果、「く」の字形に墳丘裾部の葺石残欠を検出したことから、その周辺について追加調査を行い、帆立貝式古墳の造り出し部を確認した。造り出し部の規模は、幅13.4m、長さ 8.3mを測り、円丘部を含めた全長で63.3mとなった（岡山県月の輪古墳と同形態）。葺石は、高さ約50cmが残っており、主に20~40cmの切石を使用している。周濠内の出土遺物には、下層で6世紀中葉の須恵器杯身1点のほか、葺石上で朝顔形埴輪の破片等があった。

埴輪は摩滅が激しくその諸特徴は不明であるが、その形態から5世紀後半~6世紀前半のものと思われ、古墳築造時期もその頃に比定される。また、この古墳の南で検出した奈良時代の溝跡からは、刀子あるいはヘラにより弓矢と鳥を線刻した円筒埴輪（川西編年第IV期）が出土している。

（蒲生町教育委員会 北川 浩）

16. 溝で区画された住居群と古墳群を検出

蒲生町市子 平塚・市子遺跡

当該地は、蒲生郡蒲生町のはば中央に位置しており、日野川と佐久良川に挟まれた沖積地に立地する。調査地の周辺には、集落遺跡が密集しており、田井遺跡・堂田遺跡・平塚遺跡・市子遺跡に包囲されている。

調査は、県営は場整備事業に関連するもので、約5,000m²範囲を発掘した。

調査地は、800mの距離を隔てて南北に分かれ。このうち南部の調査区では、古墳時代の竪穴住居15棟と古墳2基を検出した。竪穴住居と古墳は幅12mの大溝によって区画されている。

竪穴住居は、いずれも方形プランをもつもので、5



竪穴住居（SH8709）の造り付けカマド

世紀中葉の炉をもつ住居と、5世紀後葉の造り付けカマドを持つ住居に分類される。カマドを持つ住居からは、陶邑窯T K216・TK208併行期の須恵器が出土しており、大津市野畠遺跡や安曇川町南市東遺跡と同様に初期須恵器を出土し、造り付けカマドを伴う竪穴住居の集落と理解できる。また、住居区と別に区画された古墳2基は、マウンドを残さない低墳丘墓であり、炉をもつ竪穴住居と対になると考えられる。

一方の北部の調査区では、自然河川の南西縁辺部に弥生時代中期中葉の方形周溝墓5基以上を検出した。この方形周溝墓は、昭和60年度に蒲生町教委が発掘した18基の周溝墓に連続するものであり、今年度の調査によって、方形周溝墓群の拡がりは、東西 200m・南北 500mに及ぶことが明らかになった。

（財滋賀県文化財保護協会 宮崎 幹也）

17. 平安時代の琴を発見

蒲生町大塚 杉ノ木遺跡

杉ノ木遺跡は、蒲生郡蒲生町大塚・田井に所在する。周辺は、田井遺跡・平塚遺跡・市子遺跡など遺跡の密集地であり、また最近の調査では遺跡範囲の拡がりが確認されている。今回の調査は、県営は場整備事業に伴うもので、約10,000m²を対象とした。検出した主な遺構は、古墳時代の竪穴住居15棟以上、自然流路、平安時代前期の溝跡、平安時代後期の溝跡、土塙、掘立柱建物7棟以上、室町時代後期の土塙、溝跡、柱穴群などである。遺物も多く、須恵器、土師器、黒色土器、瓦器をはじめ、木製品、石製品（勾玉模造品、玉砥石）などが出土した。

木製の琴は、平安時代前期の溝（幅 3.5m、深さ 1m）から出土した。長さ 158cm、幅15~23cm、厚さ 2~3cmを測る。琴板くびれ部の絃孔、琴尾の突起などから三絃琴だとわかった。一枚の板で琴板と磯部を作り、また琴頭部は先端に向って少し開き気味に作られている。琴板裏面は音を響かせるためか、幅10~15cm、深さ約 1cm のミゾがほり込まれている。県内では、



琴 出土状況

服部遺跡、赤野井遺跡、赤野井湾遺跡（守山市）、中沢遺跡（草津市）、森浜遺跡（新旭町）などから出土しているが、いずれも弥生時代後期から古墳時代中期のもので、平安時代の琴としては県内でも初めての出土である。また、全国的にみても珍しく、正倉院、伊勢神宮に保管されている琴や福岡県沖ノ島祭祀遺構で発見された琴と構造的に類似しているものもあり、琴の変遷を考える上で貴重な資料であると思われる。琴が宮廷における祭祀や神樂に使われていたことや、政治的、宗教的権威をもつ人々が演奏していたことを考え合わせると、大塚周辺に祭りごとを司る人々の存在をうかがわせる。

（蒲生町教育委員会 斎藤 博史）

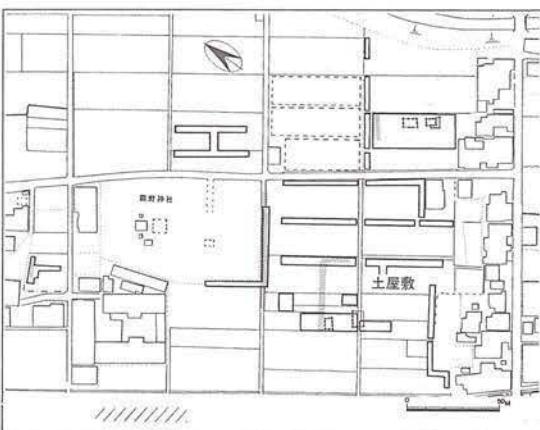
18. 「土屋敷」の発掘

安土町香庄 香庄遺跡

県道大津能登川長浜線を近江八幡市との境で南に折れると、安土町大字香庄の集落に入って行く。集落の中程には6世紀に推定される古墳群を抱えた熊野神社が位置しており、その南隣接地が「土屋敷」と呼ばれる調査地である。明治6年の地券取調総絵図を見ると、当地は畠地として記入され、このあたり一帯が桑畑であったことが読みとれる。また調査前の地元での聴取によれば、土屋敷の一画がもとは小高く盛り上がったところで、戦後の土地改良の際にそのちょうど東北にあたる溜池を埋めるために土取りされたとのことであった。

ところで「土屋敷」は武士の屋敷跡との推定がなされており、室町時代もしくはそれ以前のものと考えられている。

調査は場整備事業に通有のごく限られたトレンチのみの設定のため遺構の全容を知るには困難であり、従って大胆な推測を必要とするが、以下調査の結果について概要を報告する。



土屋敷遺構略図

- ① 熊野神社の南辺沿いに設けられたトレンチでは、条里方向の溝（幅1m以上）が東西に延びている。これは当区の西に隣接する高木遺跡検出の条里方向の溝に連なるものと思われ、条里地割の坪境と考える。遺物は鎌倉期から室町期のものが出土している。
- ② この溝と平行して「土屋敷」部分で幅80cmの溝が検出され、この東端が南へ直角に折れることを確認した。これは深さ1m前後を測る。「土屋敷」の堀跡と考えられる。
- ③ この堀跡の内側には方位の異なる二棟の掘立柱建物が検出された。一方は堀跡近くで2×3間の規模をもち条里とは方位の異なるもので、他方は4×3間以上の条里方位の建物である。このうち後者はピットの掘方が径80cmと大きく、深さも60cmを測る。
- ④ 後者の掘立柱建物を母屋と仮定してこれを「土屋敷」の中心と考えれば、堀の一辺はほぼ60~70mと推測される。

以上が当調査における検出遺構のあらましである。これらの遺構が示すとおり当地域では、蒲生郡条里の地割と中世武家屋敷の繩張りという興味ある問題を提起することができ、また従来多くの問題を抱えながら論じられてきた蒲生郡条里の地割のあり方などに、新しい資料を付け加え得るものと考える。

今後の調査資料の整理を待ってさらに検証、考察を加えて行きたい。

（安土町教育委員会 石橋 正嗣）

19. 二之宮神社境内の神社庭園

中主町西河原 西河原宮ノ内遺跡

二之宮神社は、野洲郡中主町大字西河原字宮ノ内に所在する、西河原集落の鎮守である。社伝によると、祭神は天児屋根命と経律主命の二座で、欽明天皇の世に鎮座し養老二年（718）に始めて社殿を造営したという。

境内の敷地は、約13,000m²と広く、敷地南東にある社殿周辺以外は林となっている。この林の中には、京



貼石の施された隅丸方島

都大学農学部の村岡正氏が『滋賀県の庭園（第3集）』（県教委、1960年、P53）において「…樹林地の地形にかなりの起伏があり、流れがあって小さな中島も認められる。…現状でははっきりわからないが、案外古い遺水跡かも知れない」と指摘されたものがみられる。

町教委では、この指摘を受け、本遺構の現況測量とその一部について試掘を行ない、遺水状のものが単に湿気抜き溝であるのかそうでないのか、またその構造と築成年代の手掛かりを得る目的で、町指定の為の未指定文化財調査の一環として実施した。

今回発見した主な遺構は、狭小なトレンチによる調査にもかかわらず、境内地南では2m余りの溝を巡らせた貼石の円島（径約7m）・隅丸方島（一辺約6m）と水路が、境内地北・西では幅2m余りの複雑な素掘り溝群等がある。遺構は、最下層出土の遺物から12世紀後半に作られ、その後14世紀後半～15世紀初に貼石・貼床などの再整備を行ったものと考えられた。

本遺構を特徴づけるものは、円島・隅丸方島・遺水状の曲水遺構である。これらには、貼石や貼床、護岸などがみられ、周辺の川より引水し流れのあったことも明らかであるから、観賞を意図したものであることは疑いえない。しかし本遺構を庭園とした場合、一般的な日本庭園の概念とは可成り趣を異にしており、日本庭園史の中でも類例のない特異な庭園であるといえる。また再整備については、貼石の円礎中に花崗岩の割石が見られ、社殿建築等の契機により実施された可能性があるとともに、惣村の発生とこれに係る宮座の隆盛といった歴史的観点から新たに評価されねばならないと考える。

今後は、本庭園の正しい評価がなされることを願うとともに、境内の保全と活用が望まれるのである。

（中主町教育委員会 辻 広志）

20. 小篠原遺跡の発掘調査

野洲町小篠原 小篠原遺跡

野洲郡衙推定地として知られる小篠原遺跡の本年度の発掘調査は、1,000m²前後の比較的小規模な調査が多く実施された。これらの調査の中から3件について簡単に紹介する。まず町役場裏に位置する小篠原字上池田地区では、駐車場用地造成に伴い約1,200m²が調査された。調査の結果、7世紀から12世紀に至る掘立柱建物群、柵列、井戸、土塹などが多数検出された。また同時に郡衙の地割と推定される四町四方の特殊地割の東西軸に乗る、奈良時代の道路状遺構を検出した。この他にも、掘立柱建物の建替えに伴う建築廃材が大量に投棄された、奈良時代頃の井戸跡などもみつかっている。一方、昭和55年度に大規模掘立柱建物群や、数時期に及ぶ倉庫群を検出した字堂ノ後地区において

も、発掘調査が実施された。調査面積は約800m²であるが、柱穴規模の大きな掘立柱建物を含む、奈良～平安時代の掘立柱建物を10棟以上検出した。以上の二調査では官衙関連施設と考えられる遺構が多数検出されたが、最後に紹介する字下池田調査地ではむしろ弥生時代～古墳時代の遺構が多く検出された。調査面積はI～III地区合わせて約800m²であるが、このうちI～II地区からは、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居が4棟検出された。またII地区では5世紀中葉から後半の削平古墳が1基検出された。古墳は周溝のみが部分的に検出されたが、現状から推定径30m～40mの円墳が復原される。周溝内からは土師器、須恵器、埴輪が多量に出土している。埴輪には円筒、朝顔、衣蓋、盾、馬、家、動物などが認められる。この他にも奈良時代の土馬が3個体分本調査地から出土している。小篠原遺跡の発掘調査が初めて実施されて本年度で12年となるが、そろそろ調査成果の集成が試みられるべき段階に至っていると言えよう。

（野洲町教育委員会 森 隆）

21. 鎌倉時代の農村を発掘

野洲町南桜 西田井遺跡

遺跡は、野洲川と大山川によって形成された自然堤防上に立地し、三上山の南側にあたります。したがって、大山川・小山川の堆積作用により、全体に砂質化した土壌（花崗岩のバイラン土）によって覆われ、その下層に黄褐色粘土層をベースとして遺構が分布しています。遺構は、掘立柱建物76棟・条里溝・井戸3カ所・火葬墓3カ所・木橋1カ所・水田跡・土塙16カ所等が検出され、飛鳥時代～室町時代にかけてのものです。特に鎌倉時代の条里溝によって区画された集落は注目すべきもので、掘立柱建物73棟から構成される。区画溝を有する建物群は、調査区内に3カ所が確認された。そのうち、1辺25～30cmの屋敷地を持つ区画は、条里溝を利用し2重溝としている。その内に、井戸を中心にして5～6棟の掘立柱建物が配置されている。また、屋敷墓として火葬墓が北東隅と西南隅に設けられている。火葬墓は長さ60cm×幅30cmの木櫃内に火葬骨を納め、木炭を詰める構造で、故地で火葬された後に屋敷内に埋葬されたものと言える。他の掘立柱建物群は、2～3棟を単位としてまとまりが認められ、井戸・墓地等は伴わない。したがって、区画溝を有するものが名主百姓層の屋敷、他のものが小作人層の家屋群と理解される。

条里溝は、幅0.9～1m、深さ1～1.2mを測る東西溝と幅0.9～1.5m、深さ0.4～0.6mの南北溝からなり、基幹水路は東西溝と考えられる。その一部には、幅0.8mの枕列が直交して並ぶものがあり、木橋と思われる。

遺物は、黒色土器、土師器、縁軸、灰軸、木製品等の日常雑器が大半を占める。

また、遺跡北側の若宮神社の棟札が永享3年（1431年）であり、本来は西田井遺跡に伴う神社のものと推察される。

この遺跡も大山川の氾濫による洪水によって、室町時代には現在の南桜集落へ移動し、集落として終焉する。
(野洲町教育委員会 花田 勝広)

22. 墓域と居住域が判明

栗東町高野 高野遺跡

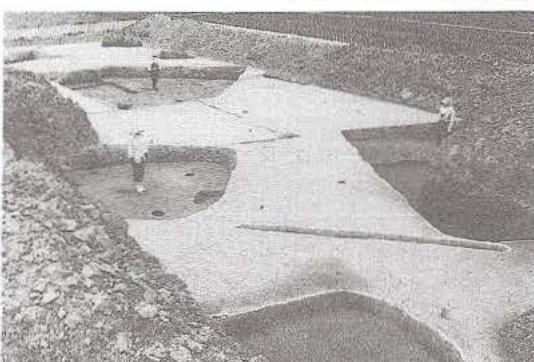
高野遺跡は、野洲川左岸自然堤防状微高地と、島状微高地に築かれた古墳時代前期を中心とする集落跡として知られている。

今回の調査は、共同住宅建設に伴う事前調査で、昭和62年4月から5月にかけて行われた。

確認された遺構は、古墳時代前期の竪穴式住居7棟、周溝状遺構1基の他、土塙・溝・ピットなどが検出された。竪穴式住居は、ほぼ方形を呈し、4本の主柱穴をもつ。中央には炉が設けられ、南壁中央部に土塙をもつものが多いが、5号住居跡のように東側に設けているものもある。また、周囲には、壁溝を巡らすものと、巡らさないものがあり、2号住居跡には拡張した跡が認められた。規模は、一辺が4~5mのものと、7~8mのやや大きめのものとがある。調査区東側では、二つの住居跡が重複しており、それらの住居跡を切って古墳の周溝と考えられる溝が造られていた。その周溝状遺構は方形に巡ると考えられ、深さ60cm前後幅2mを測り、推定で1辺10m前後のものと思われる。

出土遺物は、庄内式併行期から布留式前半併行期にかけての土師器（甕・壺・高杯・器台など）が出土し、その中には北陸系と思われるものも含まれていた。

60年度に、今回報告した調査地のすぐ前を調査しており、調査区北側隅で重複する2棟の住居跡を確認した以外は、古墳と思われる周溝状の遺構で大半を占め



調査区全景（南方向より）

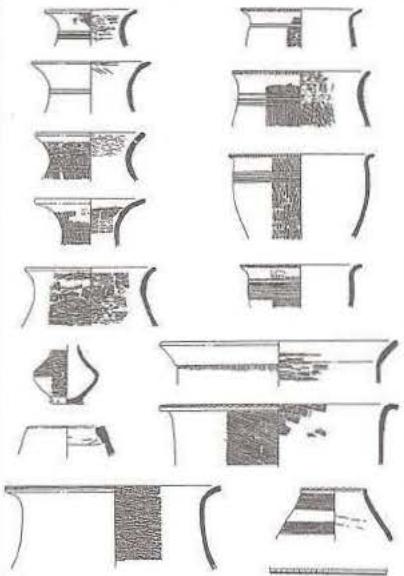
ており、このあたりが墓域と居住域を区切る場所ではないかと考えていた。今回の調査でより一層確実なものとなり、高野遺跡は、墓域と居住域がセットとなった古墳時代の集落として今後の研究に重要な資料を提供することとなった。

(財)栗東町文化体育振興事業団 近藤 広)

23. 野洲川下流域の初期農耕集落

守山市杉江 小津浜遺跡

新守山川改修工事に先立つ調査で、本年度は琵琶湖湖岸から上流300mの間を主に調査した。今回の調査では、弥生時代前期から中期にかけての集落跡を調査区全域で検出した他、縄文時代晚期から平安時代後期にかけての各時代の遺物を含む自然流路跡を検出した。



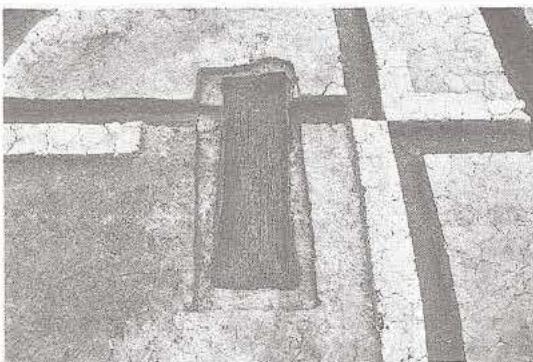
出土遺物

かけての各時代の遺物を含む自然流路跡を検出した。遺構は、弥生時代前期から中期にかけてのピット群、土塙群からなる居住区と、弥生時代中期の方形周溝墓4基からなる墓域の他、同時期の人工溝がある。人工溝は自然流路に流入する状況から、付近に水田の存在した可能性が高い。出土遺物は、弥生時代前期から中期にかけての多量の土器、石器、木器とともに、縄文時代晚期と東海地方の条痕文系土器が共伴している。他に、弥生時代前期の溝の底から炭化米が出土した。古墳時代中期から後期にかけての自然流路内からは、土師器の小型丸底壺や須恵器环身の完形品とともに、鉄鎌3点、刀子2点などが出土しており、近辺に同時期の集落の存在する可能性が高い。以上の調査結果から、小津浜遺跡は弥生時代前期から中期にかけての大規模な集落であり、周辺の赤野井浜遺跡、寺中遺跡、鳥丸崎遺跡、服部遺跡などの同時期の集落とともに野洲川下流域の初期農耕集落の実態を知るうえで欠かせない資料である。

(財)滋賀県文化財保護協会 岡本 武憲)

24. 弥生時代中期の方形周溝墓と木棺検出

草津市下物 烏丸崎遺跡



木棺検出状況

遺跡は草津市下物町地先に位置し、湖中に鉤状を呈して突き出す烏丸崎の上に所在する。過去の調査では弥生時代中期の方形周溝墓群と2基の玉造工房が検出されている。

今回の調査は半島の基部において実施したもので、琵琶湖開発事業の一環として計画された湖岸堤築造工事に伴うものである。面積は約1,150m²で、本年度4月より調査に着手し、7月に完了した。

遺構はT.P.83.7mで弥生時代中期の方形周溝墓5基と弥生時代後期の溝などを検出した。後期の溝は、方形周溝墓の周溝が埋没し、マウンドだけが顔をのぞかせている状況で、マウンドを避けるように蛇行して開削されたものである。

方形周溝墓のマウンドには20~30cm程度の盛土が遺存していた。5基の方形周溝墓のうち、他の3基とは群を異にすると思われる2基は、10m×α、10m×7mとやや大型のマウンドを持っている。さらにそのうちの1基（2号墓）からは埋葬主体として木棺が検出されている。それぞれの周溝からは、壺・甕・高壺の供献土器が出土している。他の3基は1辺5~7mとやや小型で、周溝も不明瞭であることが多い。小型周溝墓3基のうち2基からは供献土器は出土していない。

2号墓で検出された木棺は、方形周溝墓の東西の中心軸上に直角の向きに位置し、マウンドの中心より約1m東に偏している。部材は底板と両側板を残すのみで、小口板・蓋板が失なわれていたほか、側板の両端と上部、底板の上面も腐蝕、損耗している。底板は195×62×9cmに復元される。棺の構造はこの底板の上に小口板・側板を立てていたと推定される。掘り方はマウンドの盛土の途中から掘り込まれている。

本例は、埋葬主体がきわめて良好に遺存していた方形周溝墓の、県下で数少ない例のひとつである。

（滋賀県文化財保護協会 伊庭 功）

25. 弥生時代から古墳時代の墓域検出

草津市御倉町 御倉遺跡

草津川改修事業の事前調査として昭和60年度より御倉遺跡の調査を実施し、本年度は北川の北部約4,800m²の調査を行った。結果、方形周溝墓9基以上、竪穴住居1基、掘立柱建物跡3基、土壙墓状遺構3基のほか溝跡、柱跡等多くの遺構が検出された。

方形周溝墓は削平しており周溝しか残存していないが、いずれも周溝は全周するものと思われる。検出された方形周溝墓のうち最大のものは3号墓で1辺12m前後で、周溝幅は約2mである。規模では12m前後のもの2基、10m前後のもの2基、8m以下のもの5基に分かれるよう、周溝墓の方向はいずれもほぼ方位と平行に作られている。また、築造された位置でグルーピングが可能で調査区では4群に分類でき、検出状況では3~4基を1群としているようである。時期は出土遺物が少ないため明確ではないが、3号墓から庄内期の高壺が出土しており、さらに、隣接する県教育委員会の調査区で検出された方形周溝墓内から弥生時代後期の遺物および古墳時代前期の壺等出土していることから弥生時代後期から古墳時代前期にかけて当地域に築造されたものと推測される。

竪穴住居は1辺10m以上の大型の住居跡で検出された柱穴のうち2ヵ所より径25cm以上の柱根が残存していた。掘立柱建物跡は方位により2群に分かれ、建物方位を磁北より東に振る1群については出土遺物より平安時代後期のものである。

今回の調査で弥生時代から古墳時代の方形周溝墓を中心とした遺構群が検出されたが、当遺構とセットとなる住居跡は検出されなかった。しかし、周辺の水田には当該期の遺物が多数散布していることから隣接した地域に当時期の集落の存在が予測される。

（草津市教育委員会 谷口 智樹）



第3号方形周溝墓全景